

# 算命学中庸

## 【初年】 48 回目

48 回目の授業はこのページからです。

授業科目           【地時空間】

【初年】 48 回目 【地時空間】 01

### □ 地時空間 (ちじくうかん)

今回の勉強は占いの技法というよりは「二十八元表」を見ていただきたいのです。

☞「二十八元表」は34回目【人体図の出し方】28頁/29頁にも掲載されています。

ご覧になってください。

## 二十八元表

支	初元	中元	本元
子			癸 節明まで
丑	癸 9日	辛 3日	己 節明まで
寅	戊 7日	丙 7日	甲 節明まで
卯			乙 節明まで
辰	乙 9日	癸 3日	戊 節明まで
巳	戊 5日	庚 9日	丙 節明まで
午		己 19日	丁 節明まで
未	丁 9日	乙 3日	己 節明まで
申	戊 10日	壬 3日	庚 節明まで
酉			辛 節明まで
戌	辛 9日	丁 3日	戊 節明まで
亥	甲 12日		壬 節明まで

人体図の星を出すときには「二十八元表」を見て――

**節入り日** の何日目の生れかによって、二十八元にある  
ぞうかん  
 蔵干を決めたわけです。

この「二十八元表」が、どのようにして成り立ったのかという説明をします。

このことは直接、占いに用いるわけではないのですが、  
 算命学の大事な考え方が、いくつも含まれています。

『地時空間』には「十干」と（十二支）が登場します。

「十干」は 10 個の「干」で五行を当て嵌めることができます。

（十二支）は 12 個の（支）で五行も当て嵌まり、“季節”をあらわし、「生旺死」を論ずることもできます。

⇒ 季節 ⇒ [夏は暑い季節] [冬は寒い季節] です。

夏 ⇒ 暑い

冬 ⇒ 寒い

夏は暑い、冬は寒い、この季節感は当たり前のように思えますが、よく考えますと、夏とか、冬とか、呼称しているのは、時間の範囲に過ぎないのです。

夏の季節の十二支は（巳月）（午月）（未月）の 3 ヶ月。

冬の季節の十二支は（亥月）（子月）（丑月）の 3 ヶ月。

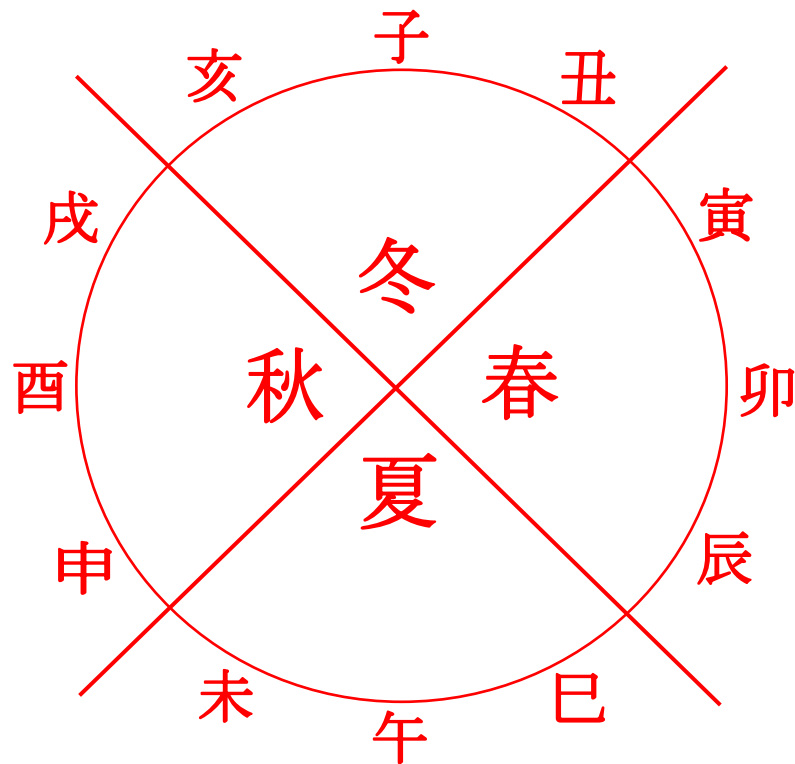
このように定めています。

1 年を巡る春夏秋冬の十二支を、3 ヶ月ずつに分割して、1 年を 4 等分に区切っています。

参照⇒ 十二支盤（1）季節の図 04 頁

十二支盤（1）季節の図

【 十二支と季節の図 】



春夏秋冬の季節を区切って、〔夏とか〕〔冬とか〕呼称しているが、それらは“時間”であると考えたのです。

夏 ⇒ 暑い } 時間  
冬 ⇒ 寒い }  
算命学は空間を「十干」であらわし、  
時間を（十二支）であらわします。

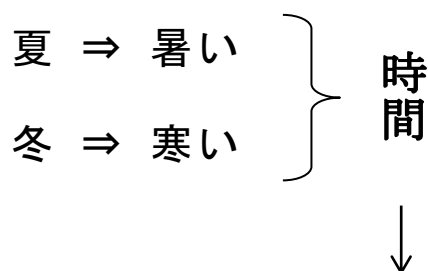
夏は、夏という時間の範囲を意味する言葉であって——、  
冬は、冬という時間の範囲を意味する言葉と考えています。

春夏秋冬の事象をよく感知しますと、時間そのものは、暑くも寒くもならないはずです。

時間とは……なにかといえ、目に見えないもので、  
さわ触って感じることもできないし、時間そのものが暑くなったり、寒くなったりすることはないはずである。  
そのように考察したのです。

参考・感知〔気配や様子から感じ取って知ること〕

参考・考察〔物事を明らかにするためによく調べて考えること〕



時間そのものが暑くなったり

寒くなったりすることはないはずである

〔たとえば〕「昨日はすごく寒い日でしたね」とか、  
「今日は暖かいですね」というときに、昨日とか今日  
というのは、あくまで時間の範囲を意味しているわけ  
ですよね。

時間を眼で見ることはできないし、心にひびくとか、

時間そのものから刺激を受けることはできない、空間の存在です。時間そのものが〔暑くなる〕〔寒くなる〕とかすることはないわけです。しかしなぜか、毎年、夏が来ると暑くなり、冬が来ると寒くなるのです。

そこで、昔の中国の人達はつぎのように考えたのです。暑くなったり、寒くなったりするのは空間である。

### 暑くなったり、寒くなったりするのは空間である

算命学は、自然界は「空間」と（時間）で成り立っていると考えているわけです。

算命学は、時間を（十二支）であらわし、空間を「十干」であらわします。

時間そのものが〔暑くなる〕〔寒くなる〕とかすることはないわけです。

暑くなったり、寒くなったり調節できるのは“空間”だと考えたのです。

空間を透<sup>とお</sup>して、私たちの五感は〔暑さ〕〔寒さ〕を感じることができます。

つまり、夏という季節の時間が巡<sup>めぐ</sup>って来て暑くなるの

は、その時間のなかに、暑さをもたらす空間が含まれているからである。という考え方をしたわけです。

夏に暑くなるのは、夏という時間のなかに、  
暑さをもたらす空間が含まれているからである

**空間と時間** この考え方が基になりまして、十二支それぞれの時間のなかに、どのような空間が存在するのかを考察して、二十八元の蔵干が決まったわけです。

算命学は、時間と空間といえは、時間を（十二支）であらわして、空間は「十干」であらわします。


### 十二支

夏暑くなるのは、夏という **時間** のなかに、  
暑さをもたらす **空間** が含まれているからである。

### 十干

簡単にいえば、それぞれの時間（十二支）のなかには、空間「十干」が含まれているということです。

このような考え方が、「二十八元表」作成の基になっています。

07 頁  **空間と時間** この考え方が基になりまして、十二支それぞれの時間のなかに、どのような空間が存在するのかを考察して、二十八元の蔵干が決まったわけです。

さらに……《3つ》の考え方が加わり、二十八元ができたのです。《1》《2》《3》を順番に説明します。➡➡11 頁

🔍 理解しやすいように……。

❖ 季節の十二支は ( ) をつかいました。

[たとえば] 春の十二支は (寅卯辰) です。

❖ 三合会局の十二支は 〈 〉 をつかいました。

[たとえば] 木性の三合会局は 〈亥卯未〉 です。

❖ 二十八元の十二支は □ をつかいました。

[たとえば] 二十八元 **子** の蔵干は [癸水] です。

そして、蔵干の十干には [ ] をつかいました。

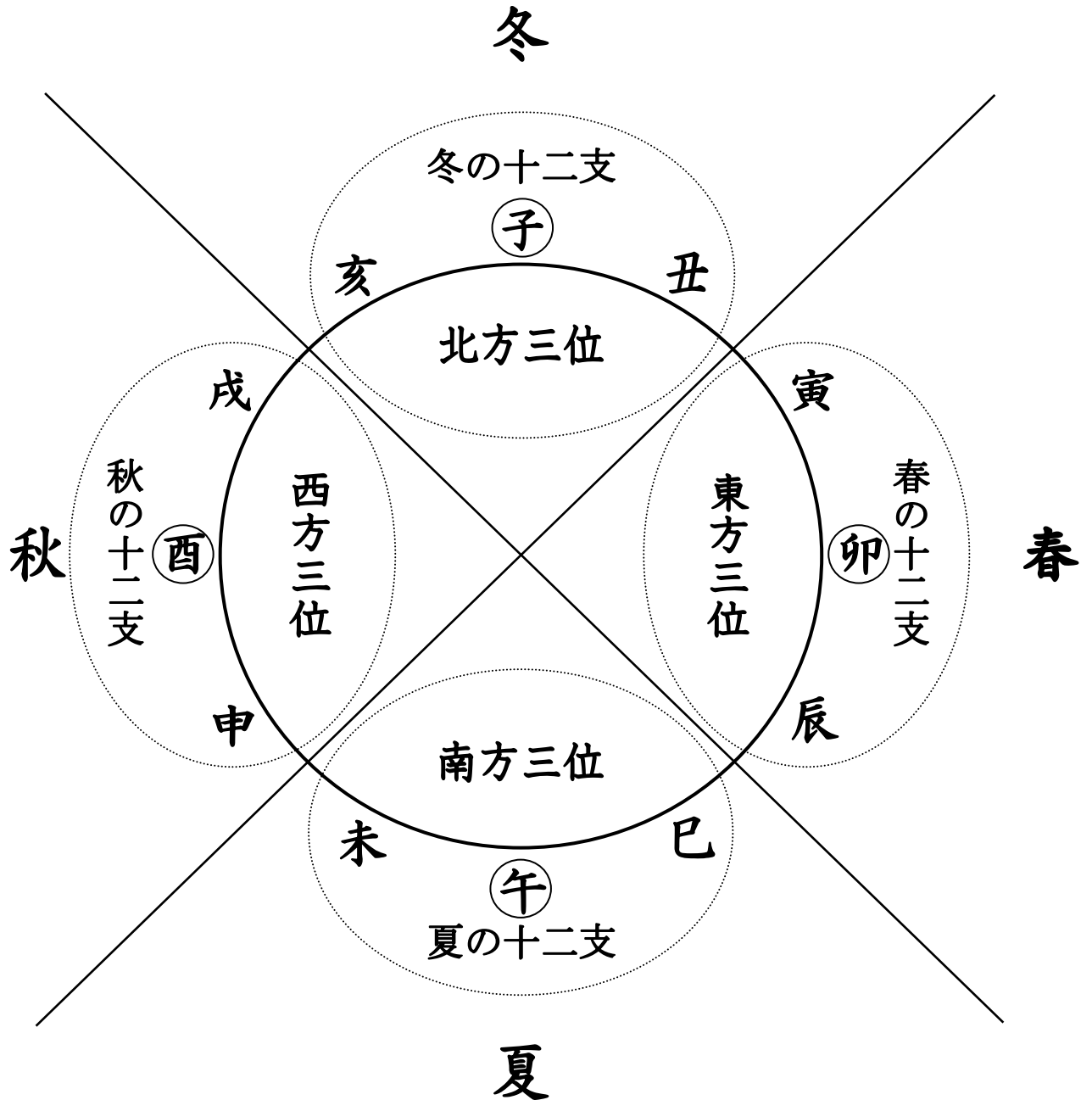
十二支はすべておなじなので、混乱する場合があります。

そこで上記のように使い分けました。



④ 方三位の図 (ほうさんいのず)

方三位の図 (2) 十二支盤



北は水性の旺地・冬・北方三位の十二支は (亥子丑) です。

東は木性の旺地・春・東方三位の十二支は (寅卯辰) です。

南は火性の旺地・夏・南方三位の十二支は (巳午未) です。

西は金性の旺地・秋・西方三位の十二支は (申酉戌) です。

⇒ 「方三位<sup>ほうさんい</sup>」 という技法があります。

方三位の図 (2) 十二支盤 を見ると、季節・方角が記載されています。[たとえば] (亥子丑) の季節は冬、水性の旺地<sup>おうち</sup>であり、方角は北の三位<sup>さんい</sup>に位置し、それに相当する十二支が (亥子丑) になります。

三位とは場所の意味

生 旺 死

冬の十二支は (亥子丑)

春の十二支は (寅卯辰)

夏の十二支は (巳午未)

秋の十二支は (申酉戌)

十二支盤 (2) 方三位 08 頁

参照ください。

冬の季節にも (冬の始) (冬の中心) (冬の終) という「生旺死<sup>せいおうし</sup>」があります。

⇒ 各季節の十二支の組み合わせは ( ) で囲んだ

〔注意〕 十二支の組み合わせが異なります。

⇒ 三合会局の十二支の組み合わせは < > で囲んだ

異なる

生 旺 死

水性の三合会局 < 申子辰 >

木性の三合会局 < 亥卯未 >

火性の三合会局 < 寅午戌 >

金性の三合会局 < 巳酉丑 >

生旺死 (3) 十二支盤 15 頁

三合会局 (4) 始 中心 終 21 頁

三合会局 (5) 生旺死の図 22 頁

ご参照ください。

## さらに……その《1》「方三位」と 十二支

⇒ 「方三位」 春の十二支は（寅 卯 辰）の三つです。

春の季節	{	（寅）	参照 <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">十二支盤（2）方三位</span> 08 頁
		（卯）	
		（辰）	❖ 季節の十二支は（ ）をつかいます。

春になると、自然界は緑におお覆われます。

自然界が急速に緑でおおおわれるのは、木性という空間が含まれているとしたのです。

🔍 そこで……二十八元表を見てください、

春	{	寅	}	木性〔甲・乙〕が含まれている
		卯		
		辰		

二十八元の十二支は  をつかいます。

春の十二支 寅 卯 辰 の蔵干には、五行木性の〔甲木〕あるいは〔乙木〕が含まれています。

春の季節の十二支（寅）（卯）（辰）が巡<sup>めぐ</sup>って来ると自然界が緑に覆われるのは……二十八元 寅 卯 辰 の蔵干には、木性を活気づける空間の「甲木」「乙木」が含まれているから、自然界は急速に、緑で覆<sup>おお</sup>われた姿になると考えたのです。

⇒ 34回目【人体図の出し方】を勉強したときに、二十八元表について、よく理解できなかつたと思います。

二十八元表で、春の十二支 寅 卯 辰 の箇所を見ると——  
寅 卯 辰 という3つの十二支のなかに、五行木性の〔甲木〕あるいは〔乙木〕という「干」が蔵干として入っています。

### 空間

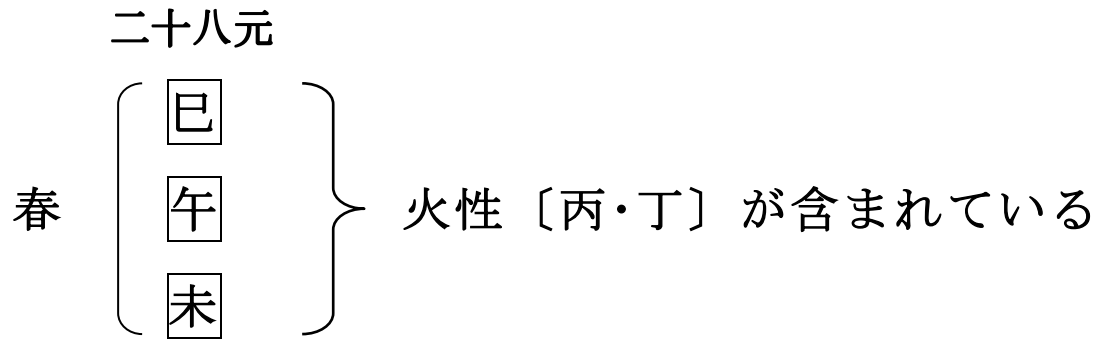
- 🔍 寅 の本元に〔甲木〕という 十干 が含まれています。
- 🔍 卯 の本元に〔乙木〕という 十干 が含まれています。
- 🔍 辰 の初元に〔乙木〕という 十干 が含まれています。

つまり、季節は春の十二支（寅 卯 辰）のいずれにも〔甲木〕〔乙木〕という木性の空間が含まれているわけです。

この考え方が基<sup>もと</sup>になり、この部分が確定したのです。

☞ 「方三位」夏の十二支は（巳 午 未）です。

夏は暑くなるから、夏の十二支（時間）には、暑さをもたらす火性の空間が含まれています。



二十八元表を見ると、夏の十二支 巳 午 未 の蔵干には、五行火性の空間〔丙火〕あるいは〔丁火〕が含まれています。

ゆえに、夏という時間（巳）（午）（未）の月が来ると、暑くなると考えたのです。 ※十二支は時間です。

二十八元表で 巳 午 未 の箇所を見てください。

巳 の本元に〔丙火〕という太陽が含まれています。

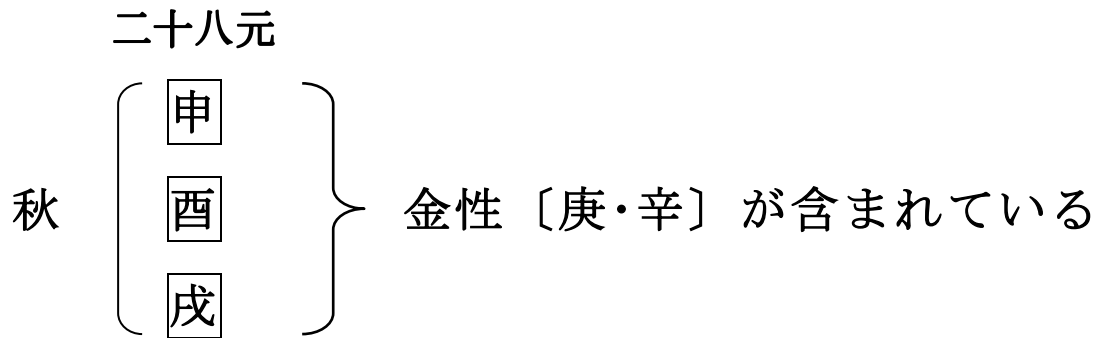
午 の本元は〔丁火〕という火性が含まれています。

未 の初元に〔丁火〕という火性が含まれています。

これら<sup>さんし</sup>三支のなかには、暑さをもたらす火性の十干が含まれているのです。

☞「方三位」秋の十二支は（申 酉 戌）です。

秋の二十八元の十二支には“冷たい水”が入っているのです。



秋になると、樹木の成長が止まって、枝葉が落ちて、枯れたような姿になってしまいます。

そうなるのは、木性をやっつけてしまう（相剋する）、金性のチカラが強くなるからだと考えたのです。

二十八元表で 申 酉 戌 を見てください。

申 の本元に〔庚金〕という金性が含まれています。

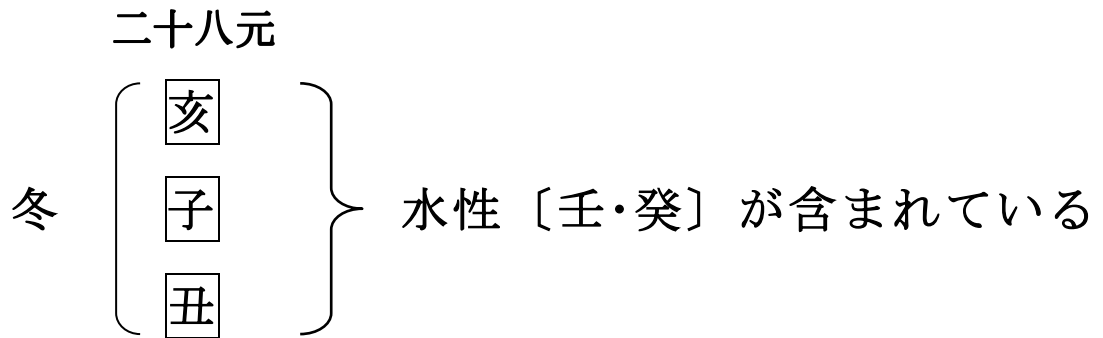
酉 の本元は〔辛金〕という金性が含まれています。

戌 の初元に〔辛金〕という金性が含まれています。

これら<sup>さんし</sup>三支のなかには、木性を相剋する金性の十干が含まれているのです。

☞ 「方三位」冬の十二支は（亥 子 丑）です。

冬は冷たい水が入っています。



☐ 亥 の本元に〔壬水〕という水性が含まれています。

☐ 子 の本元は〔癸水〕という水性が含まれています。

☐ 丑 の初元に〔癸水〕という水性が含まれています。

三支には、寒さをもたらす水が含まれているのです。

春の季節の十二支（寅卯辰）⇒ 木性の<sup>き</sup>気が含まれている

夏の季節の十二支（巳午未）⇒ 火性の気が含まれている

秋の季節の十二支（申酉戌）⇒ 金性の気が含まれている

冬の季節の十二支（亥子丑）⇒ 水性の気が含まれている

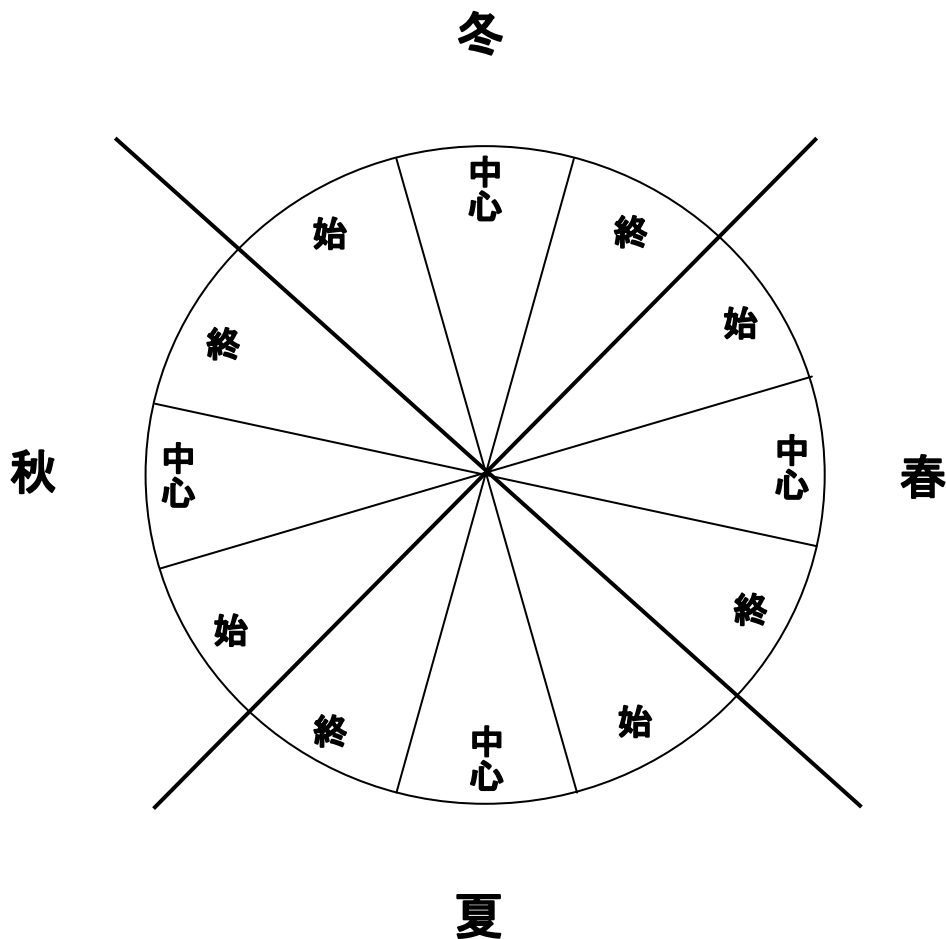
このこと理解なさっておいて頂ければ大丈夫です。

☞ ここまでは、3つの考え方の《1つ目》です。

## さらに……その《2》「生旺死」十二支盤の配置

### 生旺死（3）十二支盤

十二支盤 『生・旺・死』 始り・中心・終り



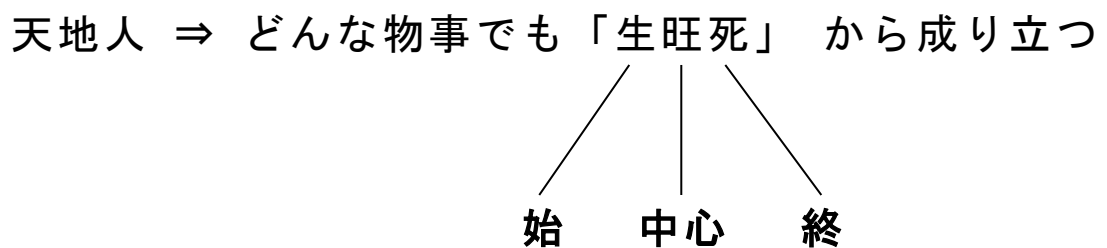
生旺死（せいおうし）という考え方は、算命学のなかでも、大事な考え方の1つです。

始めの頃に「天地人」という考え方が、昔の中国にあり



ました。とでてきました。

これはどんな物事でも「<sup>せいおうし</sup>生旺死」で、成り立つとする  
考え方です。



わかりやすくいえば、「始めと、中心と、終わり」から、  
成り立つということです。

「万物は始めと中心と終わりがある」そのように説明  
しました。

算命学では「<sup>せい</sup>生・<sup>おう</sup>旺・死」と言っています。

表現は異なりますけど「始め・中心・終わり」という  
意味です。

人体図三分法においても――、

人間の一生というのは、「初年期」「中年期」「晩年期」

これら3つの時代から成り立っています。

とお伝えしました。

あるいは、太陽も（朝）東から昇って来たら、お昼になれば天の中心に来て、夕方になれば西へ沈みます。自然界はすべて「始め・中心・終わり」という3つの区分で成り立ちます。

このような考え方は、当時の中国にあったわけですが、さらに「生旺死」と連動していると考えています。

### 『始 中心 終』と「生 旺 死」は連動しあっている

始め・中心・終わりは、3つの時代で物事が成り立つということだけではなくて、「生旺死」の3つと連動していて、お互い影響し合う関係にある。ということなのです。

……人間の一生「初年期・中年期・晩年期」を、上記の考え方に当て嵌めますと、人間の一生も「生旺死」とつながりをもって、影響しているわけです。

〔たとえば〕「中年期に会社で出世しました」という人がいて〔なぜ出世できたのかといえは〕それは中年期

に頑張って働いたから出世できました。

それも理由の一つかも知れませんが、必ず、その人物の初年期の過ごし方にも、出世の<sup>きばん</sup>基盤があるはずですよ。

〔たとえば〕子供の頃に「頑張って勉強した」それが大人になって出世につながりましたとか——あるいは、子供の頃に体を鍛えたので体力がついて、それで中年期に頑張って働けることにつながったとか、さまざまに物事が成立する<sup>もと</sup>元になる事象が存在するでしょう。中年期に出世する人がいたら、その<sup>いんし</sup>因子は必ず初年期にもあるはずですよ。

参考・因子〔ある結果を生み出すもとになる要素〕

そして、中年期に出世したのであれば、必ず、初年期の事柄は、その人物の晩年期にも影響を与えます。

中年期に出世したお<sup>かげ</sup>陰で、良い晩年が送れました。という場合もあるでしょうし、逆に……中年期に出世をしたけど、働き過ぎたために無理が<sup>た</sup>崇って、晩年には身体を壊してしまい、寿命を縮めた。という人もいるかも知れません。

中年期に出世し過ぎて、まわりの人から恨み<sup>うら</sup>を被<sup>こうむ</sup>ってしまい、不幸な晩年を送るようになった。

そういう人生の人もあるかもしれません。

「晩年になって幸せな日々を送っています」という人は晩年期に良い運勢がまわって来たから、ということも理由になるかもしれませんが、幸せな晩年を送れるのは中年期の過ごし方が良かったからです。

いずれにしましても、「始 中心 終」と「生 旺 死」という3つの時代は、お互い連動し合っているのです。

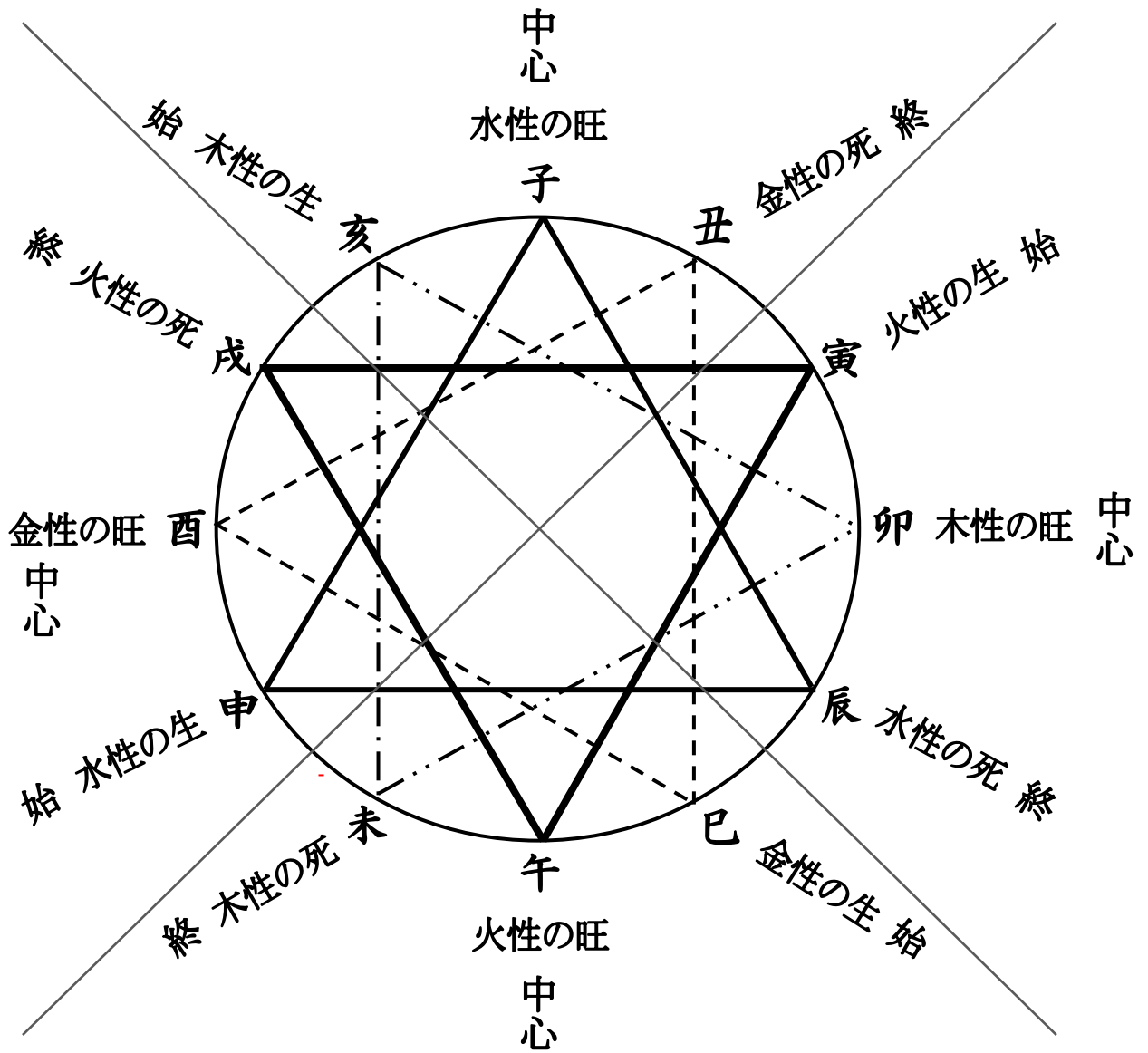
☞ それでは、「生旺死」を十二支盤<sup>あ</sup>に当<sup>は</sup>て嵌めて考えます。

それには「三合会局<sup>さんごうかいきょく</sup>」と「生旺死」の関係について、ご説明する必要があります。➡ 21 頁

三合会局の十二支は〈 〉をつかいます。

# 三合会局 と『始 中心 終』

三合会局（4）始 中心 終

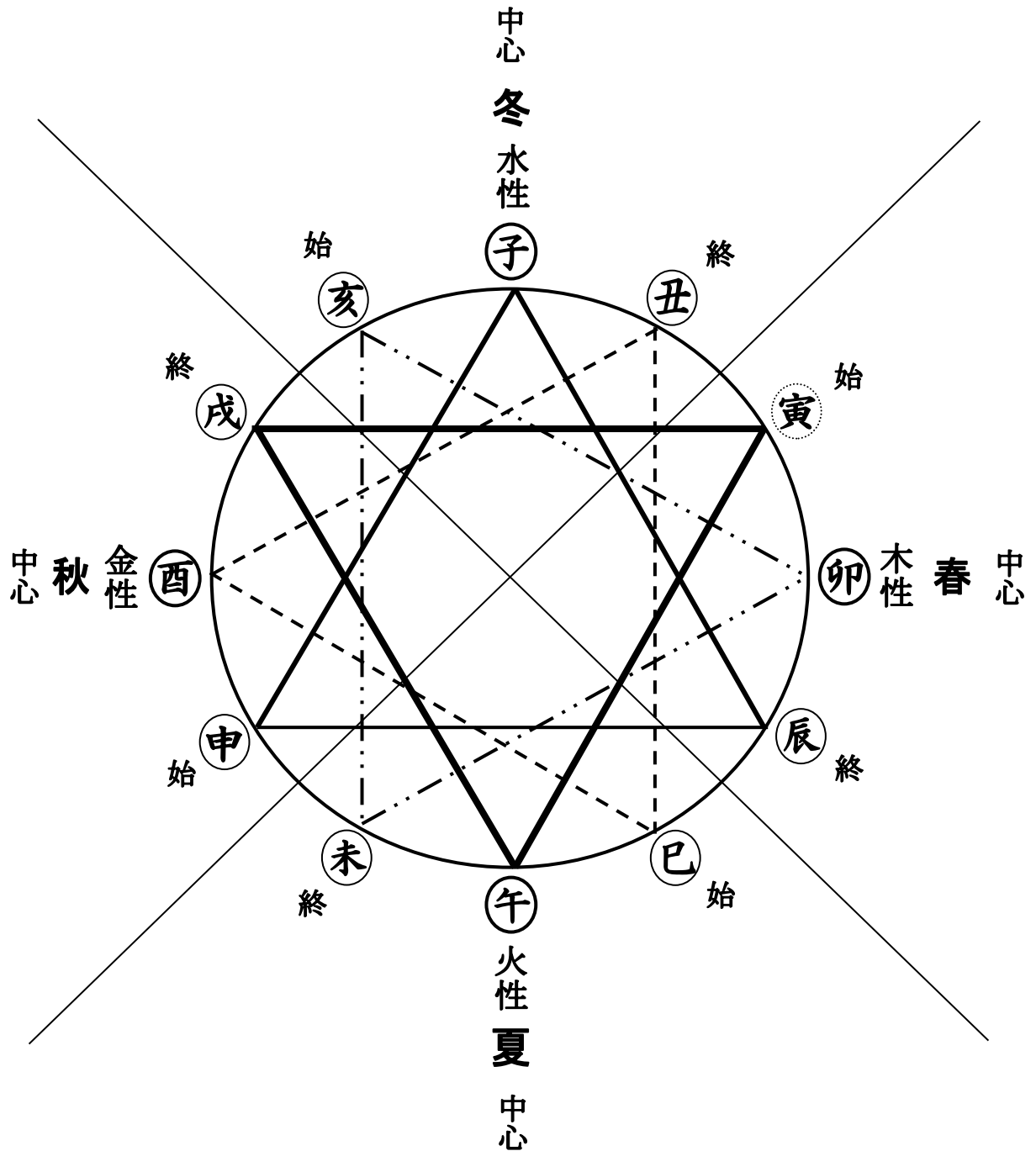


ばんしょう せいおうし  
万象は「生旺死」で成り立っています。

あらゆる物事は「はじめ・中心・終わり」で成り立っているのです。

# 三合会局 と「生 旺 死」

## 三合会局（5） 生旺死の図



① 木性の三合会局〈亥卯未〉

② 火性の三合会局〈寅午戌〉

③ 金性の三合会局〈巳酉丑〉

④ 水性の三合会局〈申子辰〉

三合会局は 4つ あります。

☞ **三合会局の図（４）（５）** を見て理解して頂きたいのです。

① **三合会局・木性の「生旺死」は〈亥卯未〉**です。

木性の生旺死は〈亥卯未〉です。

木性の「旺」中心と呼べる十二支は〈卯〉になります。

〈卯〉が「旺」で春の中心、木性のチカラが最も強くなる場所です。

〈卯〉を基点にして、正三角形を作ると（亥卯未）の組み合わせができます。 **木性の三合会局（亥卯未）**

**生 旺 死**

〈亥 卯 未〉木性の「生旺死」の組み合わせです。

木性の三合会局は〈亥卯未〉です。

三合会局は〈木性〉〈火性〉〈金性〉〈水性〉④つあります。

**生 旺 死**

① 木性の三合会局 〈亥卯未〉

**生旺死（３）十二支盤** 15 頁

② 火性の三合会局 〈寅午戌〉

**三合会局（４）始 中心 終** 21 頁

③ 金性の三合会局 〈巳酉丑〉

**三合会局（５）生旺死の図** 22 頁

④ 水性の三合会局 〈申子辰〉

ご参照ください。

② 三合会局・火性の「生旺死」は〈寅午戌〉です。

**三合会局（4）（5）生旺死**を見て理解して頂きたいのです。

火性の十二支は「<sup>はじめ</sup>始 <sup>ちゅうしん</sup>中心 <sup>おわり</sup>終」という「<sup>せいおうし</sup>生旺死」のなかで、「<sup>うま</sup>中心の旺」といえば〈午〉です。

〈午〉が夏の中心であり、火性の「旺」になります。

生 旺 死

火性の十二支〈寅〉〈午〉〈戌〉の三支は「旺」を頂点にして、正三角形に結ばれます。⇒ **三合会局（5）生旺死**

三合会局の「生旺死」は〈寅午戌〉の組み合わせです。

〈寅が火性の生〉 〈午が火性の旺〉 〈戌が火性の死〉

<sup>ひ</sup> <sup>せい</sup>  
火の生

<sup>ひ</sup> <sup>おう</sup>  
火の旺

<sup>ひ</sup> <sup>し</sup>  
火の死

このことは<sup>こよみ</sup>曆に<sup>あ</sup>当て<sup>は</sup>嵌めて考えて頂きたいのですが、三合会局で〈寅〉は火性の<sup>せい</sup>生（始まり）です。

曆のうえで〈寅〉は“春の始め”です。

そして〈寅〉は“1年の始まり”でもあるわけです。

自然界は〈寅の月〉から、暖かくなり始めます。

暖かくなり始める〈寅月〉は、火性の<sup>かせい</sup> <sup>き</sup>気が生れるところに相当しますから「<sup>せい</sup>生」なのです。



〈寅〉から暖かくなり始めた火性は、春から夏にかけてどんどん暑くなっていきます。

〈午=夏至〉で頂点を迎えます。

ゆえに、三合会局は〈午〉が火性の「旺」で中心なのです。

火性の中心を過ぎたからといっても、火性のチカラが急に無くなるわけではなくて、まだしばらくは暑さが残るはずです。残暑です。

だんだん衰えながらも、火気は残っているのです。

そして、〈戌〉は季節でいえば秋です。

### 生 旺 死

秋の十二支は〈申酉戌〉の三支です。

〈戌〉は秋の終わりの十二支になるわけです。

〈戌〉のところが、火性の「死」になります。

三合会局では、秋の終わりの〈戌〉で火性のチカラは終焉を迎えます。

つまり〈戌〉まで火性のチカラが残るわけです。

そして、今度は冬へ突入していきます。

冬に入って…… 冬の十二支〈亥子丑〉になると、もう火性は無力です。

そして、また春になって〈寅〉から暖かさがめぐって来ると、火性の気が始まって暖かくなり、火性のチカラが夏に向かって強くなり、〈午〉で頂点を迎えます。

〈午〉を過ぎて徐々に衰えても、秋に終わり〈戌〉のところで火性のチカラは消滅していきます。

三合会局の正三角形が示すように、自然界では火性のチカラが、強くなったり、弱くなったり、毎年繰り返しています。

それゆえに、三合会局では〈寅午戌〉3つの十二支を火性の「生旺死」と考えたのです。

〈寅〉と〈午〉と〈戌〉という3つの十二支は、連動している十二支であり、お互いに影響し合っているのです。「生旺死」はそのような存在なのです。

ここで知っておいて頂きたい言葉があります。

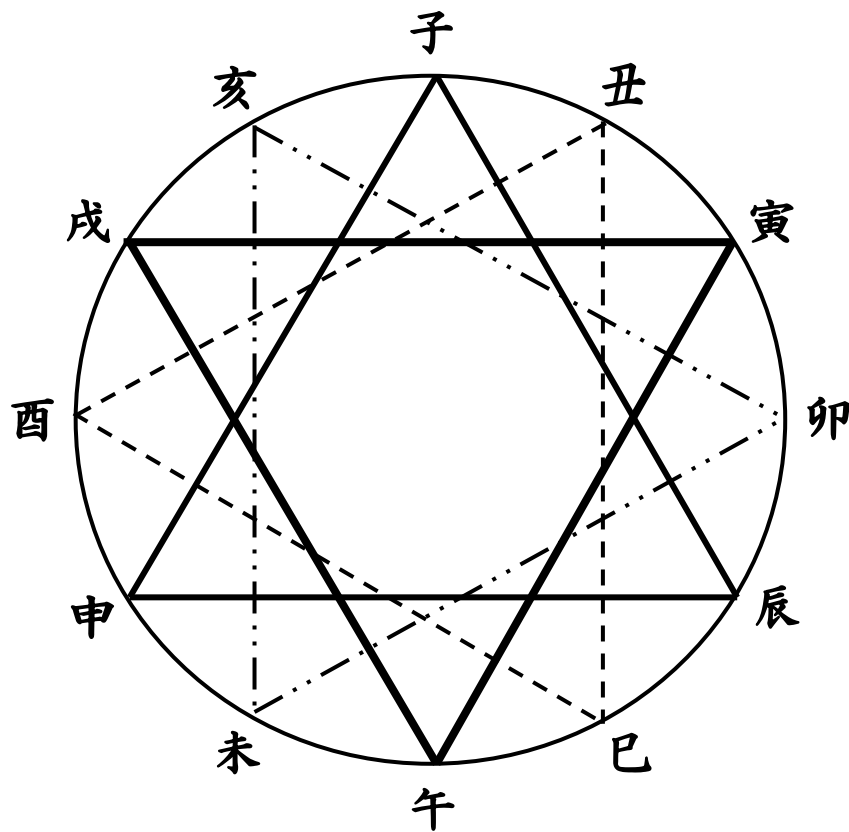
算命学では、〈寅午戌〉3つの十二支の組み合わせを、

「三合会局 きんごうかいきよく」といいます。

火性の三合会局は〈寅午戌〉です。

三合会局は十二支盤のなかで、最大の三角形を形成する結びつきです。

三合会局の図（6）生旺死



余分な×線・付記を取り除いた占いにつかう図

- |   |         | 生 旺 死         |
|---|---------|---------------|
| ① | 木性の三合会局 | 十二支〈亥 卯 未〉の結合 |
| ② | 火性の三合会局 | 十二支〈寅 午 戌〉の結合 |
| ③ | 金性の三合会局 | 十二支〈巳 酉 丑〉の結合 |
| ④ | 水性の三合会局 | 十二支〈申 子 辰〉の結合 |

🔍 21頁・22頁 **三合会局（4）（5）生旺死** を見てください。

🔍 29頁の「二十八元表」を見てください。

**寅** **午** **戌** のいずれにも火性が含まれています。

これら3つ蔵干ぞうかんは「火性が含まれている」という繫つながりがあるわけです。

**寅木** 中元に「丙火」という火性が入っています。

**午火** 本元に「丁火」という火性が入っています。

**戌土** 中元に「丁火」という火性が入っています。

**寅** **午** **戌** これら三支以外の十二支では、二十八元に火性が入っていません。

〔蔵干とは、二十八元の蔵（くら）のなかにある干（かん）という意味〕

### 下記のようにも呼称します

木性の三合会局〈亥卯未〉⇒ **三合木局** さんごうもつきよく

火性の三合会局〈寅午戌〉⇒ **三合火局** さんごうかきよく

金性の三合会局〈巳酉丑〉⇒ **三合金局** さんごうきんきよく

水性の三合会局〈申子辰〉⇒ **三合水局** さんごうすいきよく

👉👉 「二十八元表」は占いに必須です。

## 二十八元表

支	初 元	中 元	本 元
子			癸 節明まで
丑	癸 9日	辛 3日	己 節明まで
寅	戊 7日	丙 7日	甲 節明まで
卯			乙 節明まで
辰	乙 9日	癸 3日	戊 節明まで
巳	戊 5日	庚 9日	丙 節明まで
午		己 19日	丁 節明まで
未	丁 9日	乙 3日	己 節明まで
申	戊 10日	壬 3日	庚 節明まで
酉			辛 節明まで
戌	辛 9日	丁 3日	戊 節明まで
亥	甲 12日		壬 節明まで

寅 中元に〔丙〕があります。

午 本元に〔丁〕があります。

戌 中元に〔丁〕があります。

寅 午 戌 以外の十二支に火性が入っていません。

ご理解いただけましたでしょうか……？

そして、これら十二支のなかに入っている「十干」を  
〔蔵干 ぞうかん〕といいます。

蔵くらのなかに入っている「干かん」という意味です。

③ 三合会局・金性の「生旺死」は〈巳酉丑〉です。

金性の「旺」と呼べる中心の十二支は〈酉<sup>とり</sup>〉です。

〈酉〉が金性の頂点となるところです。

生 旺 死  
〈酉〉を基点にして、正三角形を書くと〈巳 酉 丑〉  
の組み合わせができます。

〈巳<sup>み</sup>が生〉 〈酉<sup>とり</sup>が旺〉 〈丑<sup>うし</sup>が死〉 金性の三合会局です。

金性は〈巳〉から強くなり始めて〈酉〉のところで  
頂点に至って、〈丑〉のところまでチカラが続きます。

巳 酉 丑 のいずれにも金性が含まれています。

これら3つ蔵干<sup>ぞうかん</sup>は〔金性が含まれている〕という繋<sup>つな</sup>がり  
があるので。

巳火 中元に〔庚金〕という金性が入っています。

酉金 本元に〔辛金〕という金性が入っています。

丑土 中元に〔辛金〕という金性が入っています。

## ④ 三合会局・水性の「生旺死」は〈申子辰〉

水性の「生旺死」は〈申子辰〉です。

「水の旺」中心と呼べる十二支は〈子〉になります。

〈子〉が冬を中心です。

🔍 25頁 三合会局（5）生旺死 を見てください。

〈申〉を基点に正三角形を作ると三合会局〈申子辰〉の組み合わせができます。

### 水性の三合会局（申子辰）

生 旺 死

申 子 辰 は水性の三合会局になります。

〈申が水の生〉 〈子が水の旺〉 〈辰が水の死〉 です。

二十八元表を見て頂くとわかりますが、〈申子辰〉は水の三合会局ですから、〔壬水〕〔癸水〕という蔵干が入っています。

申 中元に〔壬〕があります。

子 本元に〔癸〕があります。

辰 中元に〔癸〕があります。

さらに……その《3》『十二大従星表』をつかう

『十二大従星表』

- ① 日干から年支を見て ..... 第三従星
- ② 日干から月支を見て ..... 第二従星
- ③ 日干から日支を見て ..... 第一従星



十二大従星表

癸	壬	辛	庚	己	戊	丁	丙	乙	甲	日干 星
巳	午	寅	卯	亥	子	亥	子	申	酉	天報星
辰	未	丑	辰	戌	丑	戌	丑	未	戌	天印星
卯	申	子	巳	酉	寅	酉	寅	午	亥	天貴星
寅	酉	亥	午	申	卯	申	卯	巳	子	天恍星
丑	戌	戌	未	未	辰	未	辰	辰	丑	天南星
子	亥	酉	申	午	巳	午	巳	卯	寅	天禄星
亥	子	申	酉	巳	午	巳	午	寅	卯	天将星
戌	丑	未	戌	辰	未	辰	未	丑	辰	天堂星
酉	寅	午	亥	卯	申	卯	申	子	巳	天胡星
申	卯	巳	子	寅	酉	寅	酉	亥	午	天極星
未	辰	辰	丑	丑	戌	丑	戌	戌	未	天庫星
午	巳	卯	寅	子	亥	子	亥	酉	申	天馳星



⇒ 『十二大従星』も三合会局の組み合わせに関係しているのです。

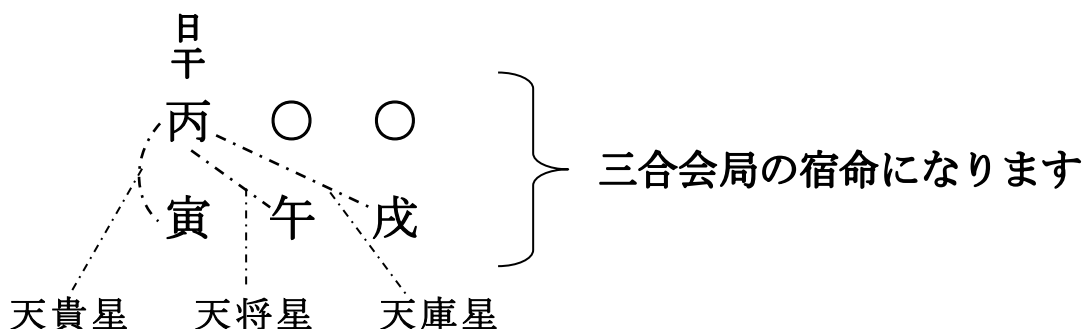
三合会局「生旺死」の組み合わせを、『十二大従星』の各星かくせいになおすと、【生/天貴星】 【旺/天将星】 【死/天庫星】という組み合わせになるのです。

その方法は、それぞれの三合会局を代表する「日干」から星になおします

**生 旺 死**

⇒ 具体的に——火性の三合会局〈寅午戌〉でやってみましょう。(こういう宿命の人はめったにいませんけど)

そこで、火性の代表として、日干「丙火」の人物がいるとして、地支に〈寅午戌〉が揃っていたとします。



この人物の宿命から人体図をだすときは、「丙火」から〈寅〉を見て星になおすと【生/天貴星】になります。

🔍 『十二大従星表』を見て確認してください。32 頁

丙火から〈寅〉を見て、星になおすと『天貴星』です。

丙火から〈午〉を見ると『天将星』になります。

丙火から〈戌〉を見ると『天庫星』になります。

〈寅〉 天貴星（児童の星）

〈午〉 天将星（家長の星）

〈戌〉 天庫星（入墓の星）

### 生 旺 死

そうしますと、何が「始・中心・終」なのかといえ、

『天貴星』 児童の星は、生れて始めて物心がつく時代です。

生まれて赤ん坊のうち、意識が備わっていません。

物心がついていないのです。

児童の時代になって、人間としての意識が始まります。

（寅） 『天貴星』 児童 ⇒ 人間の意識の始まり

人間の意識の始まり「生」は『天貴星』です。

【天将星】は家長の星です。

人生の頂点の星ですから、人間の意識の中心・頂点となる時代です。

(午) 【天将星】家長 ⇒ 人間の意識の中心〔頂点〕

その意識も中心を過ぎると、少しずつ衰えていきます。この世で【天極星・死人の星】になっても、意識はまだ残り、<sup>たましい</sup>魂が空間を彷徨<sup>さまよ</sup>う時代があるわけです。

【天極星】の<sup>あと</sup>後、【天庫星】入墓の時代で成仏します。ここまで人間の意識は続くと算命学は考えています。

【天庫星】は人間の意識の終わりの時代です。

(戌) 【天庫星】入墓 ⇒ 人間の意識の<sup>しゅうえん</sup>終焉

終焉を迎えるまで意識は続きます。ということです。

☞ 三合会局は4つありますが、いずれの組み合わせでも、その三合会局の十二支を代表する「旺」の五行をつかいます。

〔たとえば〕三合会局〈申子辰〉なら、「旺」は五行で

水性の（子水）ですから、人物の宿命を見たとき、その人物の日干が「壬水」であれば……、

「壬水」から〈申〉を見ると【天貴星】

「壬水」から〈子〉を見ると【天将星】

「壬水」から〈辰〉を見ると【天庫星】

『十二大従星』はこのようになるのです。

十二大従星表で確かめてくださいね。

あるいは、三合会局（亥卯未）の木性であれば、日干「甲木」の人物が、地支に木性の三合会局（亥卯未）をもっていると【天貴星】 【天将星】 【天庫星】になります。つまり『十二大従星』も“人間の意識”に照らし合わせて見ると、「始め・中心・終わり」という組み合わせで成り立っているわけです。

これについては、<sup>いま</sup>現在はまだ覚えなくても大丈夫です。

☞ もう少し勉強が先に進みますと、陰占の宿命を<sup>もと</sup>基にして、勢の観方に入っていくようになります。

そのときに「三合会局」が<sup>あらた</sup>改めてでてきます。

<sup>いま</sup>現在はとりあえず、宿命の地支に三合会局のどれかが

出てきたら（三合会局は4つあります）、つまり〈亥卯未〉か〈寅午戌〉か〈巳酉丑〉か〈申子辰〉のいずれかが地支にそろっている人物がいたのであれば、この人物はチョット“普通とは違う”など、そのように思っておいて頂ければよいです。

「始め・中心・終り」のすべてが、宿命の地支に揃っているということは、普通の人よりも、スケールの大きい運勢の人物になると捉えておいてください。

それが〔良いとか〕〔悪いとか〕はないのです。

三合会局の宿命はなかなかいませんよ——。

① 木性の三合会局〈亥卯未〉

② 火性の三合会局〈寅午戌〉

③ 金性の三合会局〈巳酉丑〉

④ 水性の三合会局〈申子辰〉

☞ 小泉前総理はそろっていました。

金性の三合会局〈巳酉丑〉で、とてもスケールの大きな宿命です。宇宙的に器の大きい宿命といえます。

❖ スティーヴン・ホーキング博士（英国の理論物理学者）ととまったくおなじです。 参考までに記載します ➡

✽ 小泉 純一郎 1942(s17)-1-8

	辛	辛	辛		貫索星	天極星
子	酉	丑	巳	貫索星	鳳閣星	玉堂星
丑		癸	戊	天祿星	貫索星	天印星
		辛	庚			
	辛	己	丙			

大運はホーキング博士とおなじです。

✽ スティーヴン・ホーキング 1942-1-8 [2018-3-14] 76 歳

大運

	辛	辛	辛		貫索星	天極星	1 庚子
子	酉	丑	巳	貫索星	鳳閣星	玉堂星	11 己亥
丑		癸	戊	天祿星	貫索星	天印星	21 戊戌
		辛	庚				31 丁酉
	辛	己	丙				41 丙申
							51 乙未
							61 甲午
							71 癸巳

## ⇒ 地球と『地時空間』

三合会局は「さんごうもつきよく三合木局」「みごうかきよく三合火局」「さんごうきんきよく三合金局」「さんごうすいきよく三合水局」つまり、「木性」「火性」「金性」「水性」の4つあります。

三合会局は4種類だけです。

土性の三合会局はないのです。

土性には、三合会局という考え方をあ当ては嵌められないとしています。

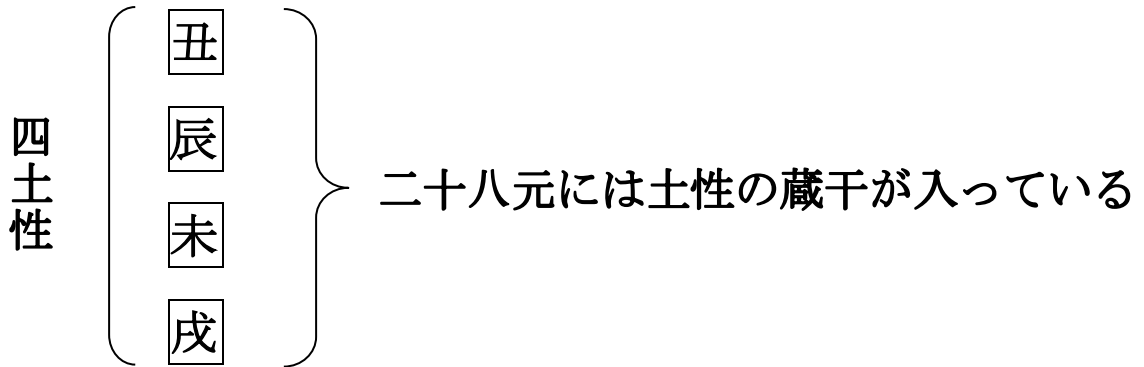
土性だけは、五行（木火土金水）の中心であり、土性は〔春夏秋冬〕どの季節にも存在します。

土性は地面であり、地球そのものですから、どの季節にも1年中存在して、季節の調整（五行のまとめ役）をやっています。という話をしたことがあります。

📖 34回目【人体図の出し方】05 ⇒ 参考資料【十干】【十二支】

48回目【十二支と季節の図】04/09/21/22 頁の十二支盤を見るとわかりますけど、×で切られている境界には、必ず、土性の十二支が存在します。4つの土性は〔季節の調整役〕をにな担っているのです。

土性は五行の調整役（まとめ役）であり、十二支盤の春夏秋冬・季節の最後にある十二支は（うしど丑土）（たつど辰土）（ひつじど未土）（いぬど戌土）のよんどせい四土性です。



土性は春夏秋冬の各季節の境目にあります。

二十八元表を見てください。

土用の十二支 

丑土	辰土	未土	戌土
----	----	----	----

 を見ると、必ず、本元に土性の〔蔵干<sup>ぞうかん</sup>〕が入っていますよ。

👉👉 ここまでは『二十八元』が作られた基本です。

二十八元についての勉強は、ここまでだと思ってください。

おもってくださいといえますのは、二十八元は、皆様がまだ学んでいない法則をつかわないにご説明できないのです。

ここまでの説明は、二十八元の基本であり、重要なことから、ここまで理解されていれば大丈夫です。

ほかの法則を学びますと「この法則も二十八元に取り入れられている……」と、ご理解されるようになるでしょう。

多くの技法と考え方に基づいて、二十八元表が出来上がっていることを、ご理解されると思います。



⇒ 『地時空間』は、つぎの3種に大別されます。

① 季節の「生旺死」によるもの——。

〔たとえば〕冬は寒いから、冬の十二支（亥子丑）には、水性が入っています。

② 三合会局の「生旺死」によるもの——。

三合会局は4つあります。

〔たとえば〕水性の三合会局の十二支〈申子辰〉のなかには水性が入っています。

火性の三合会局の十二支〈寅午戌〉には、火性が含まれています。

③ 地球によるもの——。

これは地球そのものが土性です。


十二支盤の季節が変わる<sup>よんどよう</sup>四土用のところには、土性の『気』が存在しています。

そこは特に土性のチカラが強いところです。

上記の3つが主な考え方です ➡

☞ そうしますと、二十八元表の **子** と **丑** を——  
 [例え] <sup>たと</sup> にして書きます。

	初元	中元	本元
<b>子</b>			癸
<b>丑</b>	癸	辛	己



**子** と **丑** 2つの十二支を比べます。

二十八元表を見てください。

**子** の二十八元の蔵干は、本元〔癸水〕 1つだけです。

**丑** の二十八元の蔵干は、

初元〔癸水〕 中元〔辛金〕 本元〔己土〕と3つあります。

十二支によっては、**子** のように、蔵干が1つしかない  
 もあれば、

**丑** のように、蔵干が3つ入っているのもあります。

それはなぜだろう……と思った方もおられるでしょう。

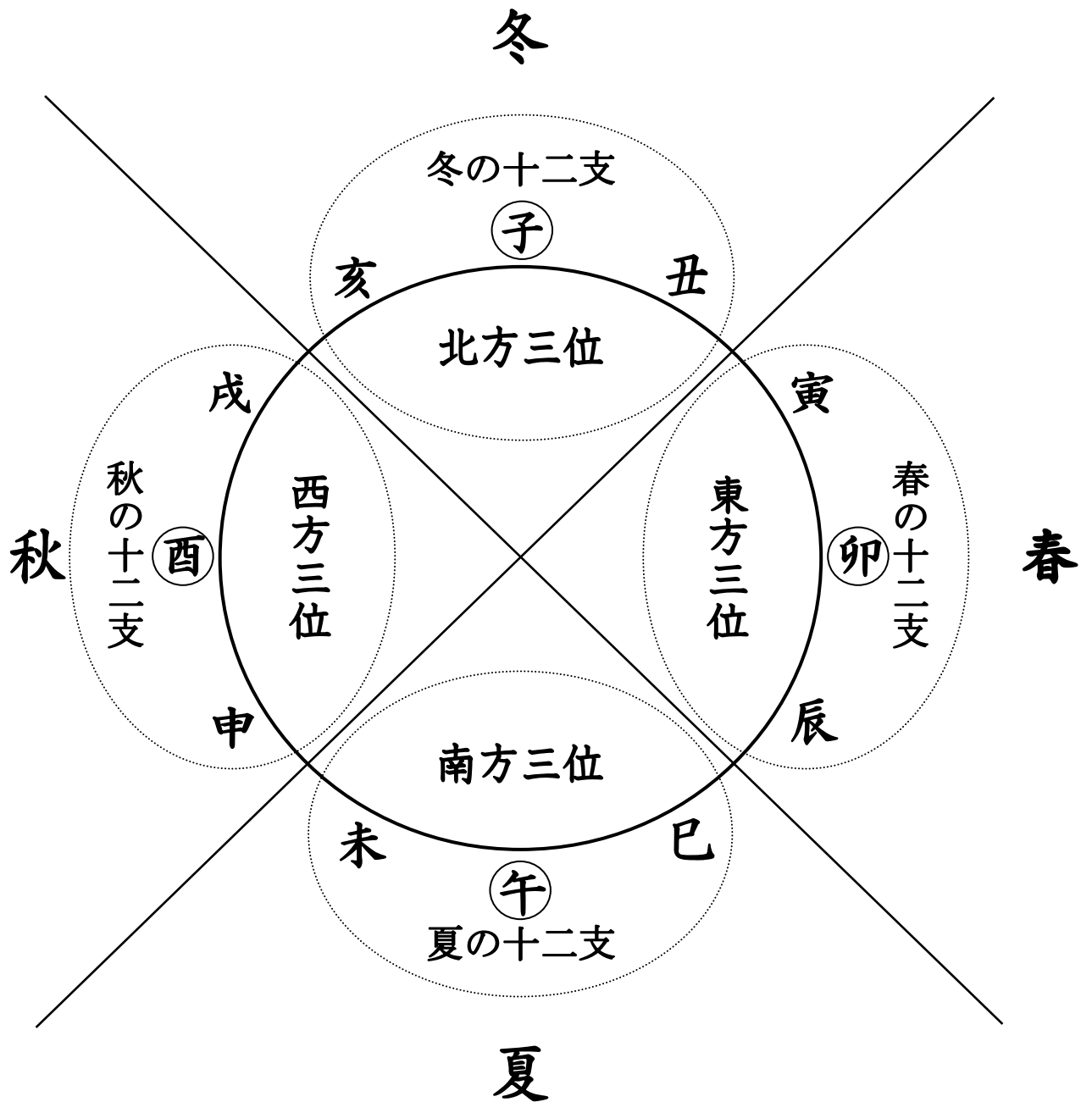
十二支を個別に考えますと、**子** なかには〔癸水〕とい  
 う水性が入っているのは、季節が冬だからです。

**十二支盤 (2) 方三位 ほうさんい** を見るとわかります ➡

冬の十二支は北方の（亥子丑）

	初元	中元	本元	} 二十八元
亥	甲		壬	
子			癸	
丑	癸	辛	己	

方三位の図（2）十二支盤



**方三位の図（2）十二支盤** に書かれているように、（亥水）の季節は冬です。

冬は寒い季節なので、水の空間が含まれています。

<sup>い</sup>亥は冬の季節の十二支です。

二十八元 **亥** の初元には〔壬水〕という水性が含まれているのです。

<sup>ね</sup>子は冬の季節の十二支です。

二十八元 **子** の本元には〔癸水〕という水性が含まれているのです。

<sup>うし</sup>丑は（季節でいえば）冬の十二支です。

二十八元 **丑** の初元には〔癸水〕という水性が含まれていません。

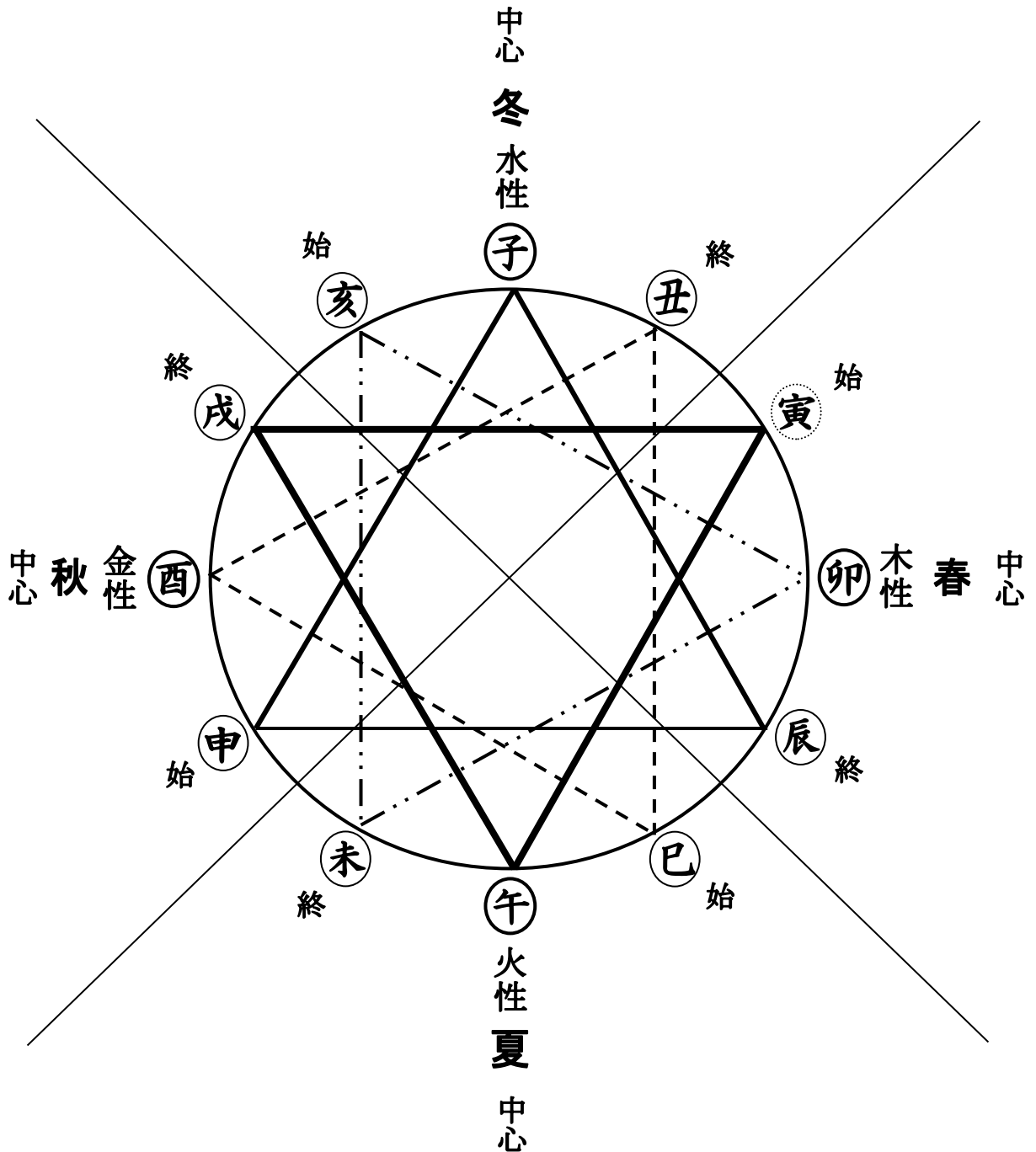
確かに（丑）の季節は冬、方角は北、水性の旺地（亥子丑）の一員です。（子水）が旺です。

しかし……三合会局の〈丑〉は、金性の三合会局〈巳酉丑〉の一員なのです。〈酉金〉が旺です。

このことを間違えないでください。

☞ 三合会局で〈子<sup>ね</sup>〉を考えます。

三合会局の図（5） 生旺死 22頁と同図



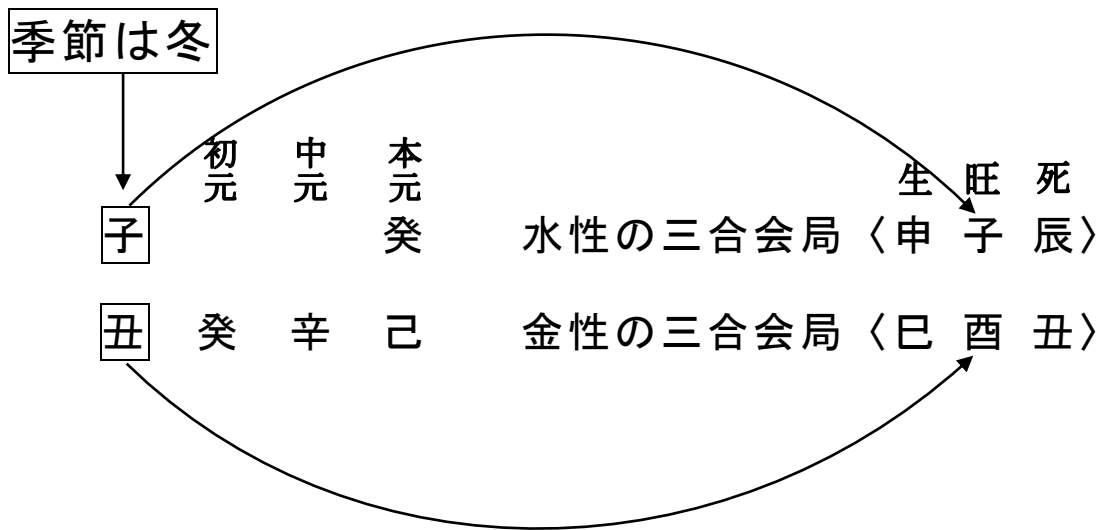
① 木性の三合会局〈亥卯未〉

② 火性の三合会局〈寅午戌〉

③ 金性の三合会局〈巳酉丑〉

④ 水性の三合会局〈申子辰〉

〈子〉は、三合会局・金性〈申子辰〉の一員です。  
 二十八元で [子] のなかに〔癸水〕が含まれている理由  
 が三合会局にもあるのです。



**旺**

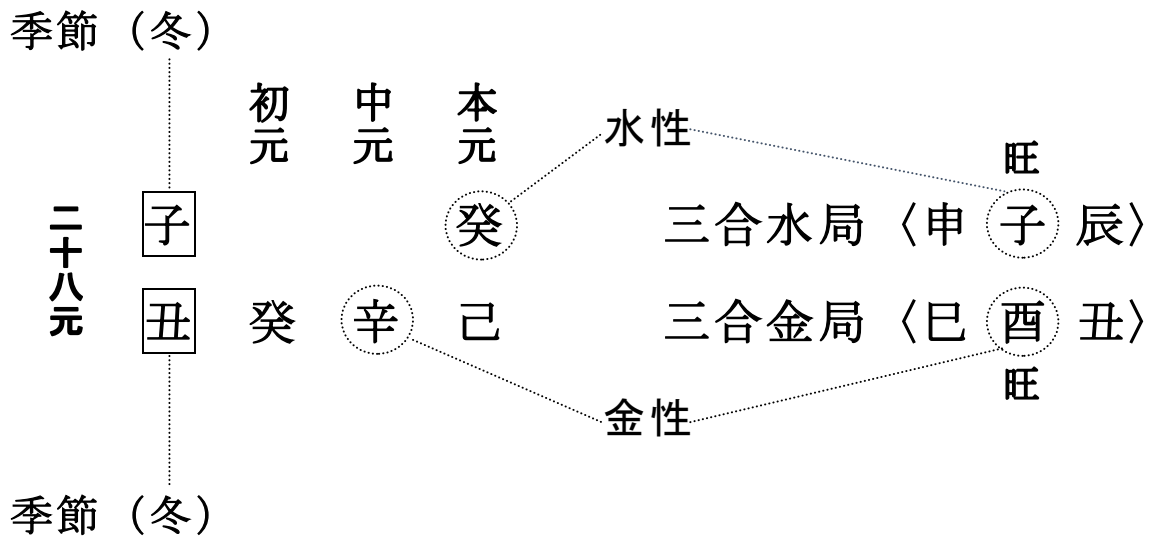
❖ 方三位の冬の季節（亥子丑）で考えても、（子）という水性が入っています。

**旺**

❖ 三合会局の金性〈申子辰〉で考えても、〈子〉という水性が入っています。

〈子〉は金性の三合会局〈巳酉丑〉の一員なのです。

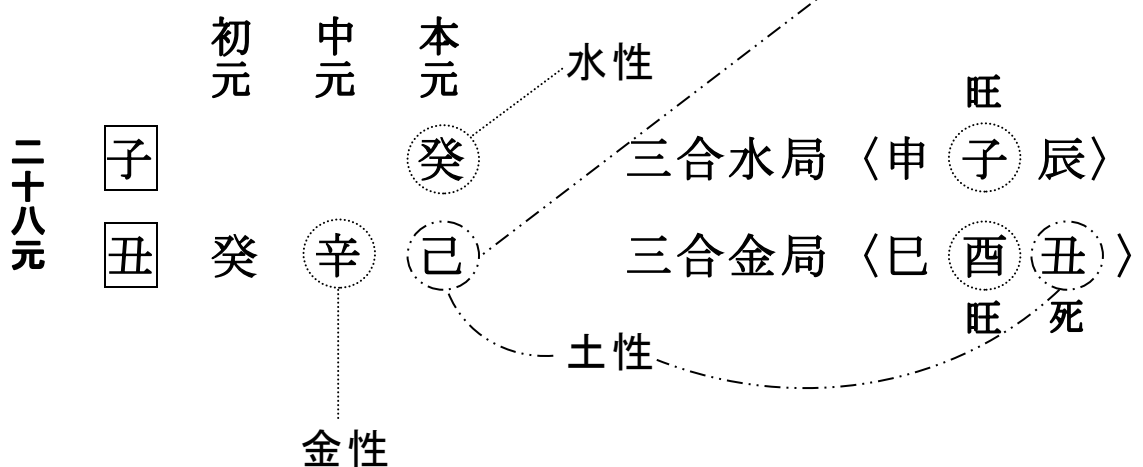
（丑）の季節は冬ですけど、三合会局の〈丑〉は金性の一員  
 なのです。 🔍このことに関しては 10 頁と 44 頁にも記載してあります。



(丑) の季節は冬ですけど、三合会局の〈丑〉は金性の一員なのです。

それで「辛金」という金性が入っているのです。

さらに 丑 は土用の十二支でもありますから〔己土〕という土性が入ることになるわけです。



このように、丑 のような十二支もあるわけです。

(子) のように、季節で考えても水が入ります。

〈子〉は三合会局で考えても、やはり水が入ります。

しかし、〈子水〉は土用の十二支ではないわけですから水性の〔癸水〕しか入っていないわけですから。

〔癸水〕は混ざり気のない純粹な水です。

(子) のように、二十八元の蔵干に〔癸水〕1 つしか入っていない十二支もあるわけですから。

このように……二十八元に、蔵干を1個しかもっていない十二支もあれば、3個もっている十二支もあるのです。

そして、冬の季節なので、水性が含まれる。といっても、水には〔壬水〕と〔癸水〕の2つありますよね。

十二支 子 に入っているのは、どうして〔癸水〕なのかということなのです。

金性にしても〔庚金〕と〔辛金〕の2つあります。

どうして、〔辛金〕のほうなのかという ことわり 理は、まだ皆さんが学んでいない法則をいくつか使って、どちらの十干になるのかが決められているのです。

それはいずれ習いますので、待っていてください。



☞ そして、二十八元については……加えて1つだけ、つぎのように思っておいて頂きたいのです。

〔たとえば〕 マリリン・モンロー

宿命は年干支から、順番に声に出して読んでくださいね。

＊ マリリン・モンロー 1926-6-1 [1962-8-5] 36 歳没

辛	癸	丙	
酉	巳	寅	
	戊	戊	}
	庚	丙	
辛	丙	甲	
陰占では二十八元の蔵干をつかう			
	牽牛星	天報星	
貫索星	牽牛星	司祿星	
天祿星	鳳閣星	天極星	

この宿命で地支の二十八元を見ると、それぞれに蔵干が入っています。

寅のなかには〔戊土〕〔丙火〕〔甲木〕が含まれています。

巳のなかには〔戊土〕〔庚金〕〔丙火〕があります。

酉のなかには〔辛金〕が1つだけ入っています。

二十八元に含まれている蔵干を全て書くと上記になります。

人体図をだすときは、モンローが **節入り日** から……  
何日目に生まれたのかによって、(寅)の蔵干3つの  
なかから、どれか1つを選ぶことで、その蔵干が星に  
なって、1つだけ人体図にでてきます。

〔たとえば〕年支(寅)のなかの本元〔甲木〕という  
ことであれば、日干「辛金」から〔甲木〕を見れば、  
第三命星に〔司禄星〕として出てくるわけです。

陰占の占いをしてゆくようになりますと **節入り日** と  
か、人体図にどの星が出るとかに関係なく、陰占の占  
いは二十八元の蔵干をすべてつかって、宿命を観てい  
きます。

陰占では **寅** という十二支があって、寅のなかに〔戊土〕と  
〔丙火〕〔甲木〕の3つあれば、3つとも占いで使います。

☞ 人体図を出すときだけは、**節入り日** から何日目かで、3つのなかの1個しか星にはなりません。

しかし、陰占の占いするときは、人体図に何の星がでているのか……それは関係無いのです。

人体図の星に関係無く **寅** のなかには〔戊土・丙火・甲木〕の全部が含まれているものとして、占いをしていくようになります。

あるいは、**酉** のなかには〔辛金〕が1個だけです。

**酉** のなかには〔辛金〕が1個だけあるということで、占いをしていくようになります。

宿命にどの十二支があるのかは、人によって異なりますが、占うときは……二十八元にあるすべての蔵干をすべて使うとっておいてください。

【初年】48回目【地時空間】 **終わります**

つぎの授業 ⇒ 【初年】49回目【人体図の観方】です。